ころにある小さな分校でした。伊策の家のある安張から約十五キロ離れたところなので、家から通うことはできません。

安張から、役場がおかれていた成岡を過ぎると、田島から若松へ通じる道路に出ます。そこから、遠く那須の山をのぞみながら山道をのぼっていくと、那須山から流れる観音川の谷にそって、わずか二十けんばかりの家がならんでいる部落がありました。そこが南倉沢でした。

人々は、すなおでかざり気がなく、とても親切でした。若い伊策のことを、「先生さま」とよび、伊策の借りた家の家賃をはらってくれたり、家々から、伊策の使うまきも運んでくれたりしました。それに、伊策の読みたいと思う本まで、人々が買ってきてくれるほど、若い先生をだいじにしてくれました。

そうした人々の心づかいにこたえて、伊策は、いっしょうけんめい、子どもたちに教えました。子どもたちも、熱心に勉強しました。